

ポートフォリオ評価の構想

国立教育政策研究所部長
高浦勝義

1 ポートフォリオとは?

ポートフォリオ(portfolio)とは、英和辞典に「紙ばさみ、折りかばん、(官庁の)書類携帯用ケース、(投資家が所有する)有価証券目録、画集、代表作品選集(画家などの)」とあるように、元来は、入れ物なり容器のことである。さらに上記引用から示唆されるように、ポートフォリオの活用は、この入れ物の中に、投資家が自己の有価証券目録を収めておくといった経済界での活用、あるいは芸術家なり画商が傑作品を集積しておくといった芸術世界での活用が先行していたことがうかがえる。

ところが、今や、この発想が教育界にも導入され、ポートフォリオ評価(portfolio assessment)として広く知られるようになっていく。その特質をみるために、いくつかの定義を紹介すれば次のようである。

「ポートフォリオとは、生徒が達成したこと及びそこに到達するまでの歩みを記録する学習者の学力達成に関する計画的な集積である」

(M.L.Tombari and G.D.Borich, Authentic Assessment in the Classroom, Prentice-Hall, Inc., 1999, P.168.)

「ポートフォリオとは、生徒に(そして/あるいは他者に)ある一定の領域におけるその生徒の努力、進歩あるいは学力達成を示す生徒の学習に関する目的的な集積」

(M.B.Puckett and J.K.Bisck, Authentic Assessment of the Young Child, Macmillan College Publishing Company, 1994, P.198.)

これらによれば、教育界においては、ある入れ物を準備し、その中に、子どもの学習の過程及び結果に関する資料・情報を目的的、計画的に集積していこうとする動きとしてポートフォリオが考えられ、構想されていることが分かる。

なお、上記のポートフォリオは、一般に、「子どもポートフォリオ」として考えられているが、しかし、他にも、例えば、教師が自己の指導方針や指導記録(子どもポートフォリオの写し等)、研究・研修記録等を目的的、計画的に収めておく「教師ポートフォリオ」、さらには教育実習生が自己の学習なり活動の記録を目的的、計画的に収めておく「学生ポートフォリオ」なども考えられている。さらに考えれば、校長ポートフォリオ、教育委員会ポートフォリオ、さらには文部省ポートフォリオ等、集積する主体やその目的等に応じて多様なポートフォリオの存在の可能性が浮かんでくることであろう。

2 子どもポートフォリオの意義とねらい

ポートフォリオ(子どもポートフォリオ)は、一般に、英国で発案され、米国で発展させられていると評されている。その米国では、とりわけ 1970 年代以降、標準テスト(standardized test)に頼る評価法が批判され、それに代わる(alternative)新たな評価として「真正の評価」(authentic assessment)が注目されている。すなわち、標準テスト(多くは多肢選択式)は、いふならば記憶的な知識の断片を問う極めて限定的なものであり、このため、子どもが「真に」そのことを理解しているか、学習したことを「現実(真に)」使えるかまでは捉えること(assess)がで

きない。さらには、思考力や創造性、人間関係諸技能、価値・態度等の発達を捉えることに困難をきたす。このため、今後は、テストの改善に取り組むのみならず、もっと子どもの成長・発達の特質をトータルに、しかもその結果のみならず過程をも視野に入れながら、文字通り一人一人の子どもを"真に"(いうなれば、まるごと)捉える在り方を考究する必要がある。このような児童中心の評価の在り方が求められるようになったと考えられるのである。

そして、それぞれの子どもの学習の過程や結果に関する姿を"真に"明らかにし、その情報を基に、教師が自己の指導の適切さやカリキュラムの適切さ等を評価し、新たな改善策を考えていくことが期待されているのである。

他方、ポートフォリオ評価においては、同時に、子ども自身が自己の学習について"振り返り"、次善の策を考えていくといった子どもの自己学習力の向上に向けた評価の在り方が期待されているのである。すなわち、自己の学習の過程や結果に関する「メタ認知的反省」(metacognitive reflection)を通して「子どもたちは彼ら自身の作業実績(performance)と彼ら自身の思考を追跡し、評価し、そして改善することに熟達することができるようになる」ことがめざされているのである

(K. Burke, How To Assess Authentic Learning, IRI/SkyLight Training and Publishing Inc., 1994, p. 96.)

なお、わが国では、このようなポートフォリオ評価の運用なり活用が総合学習に特有なものであるかのような見方があるが、しかし、そのような限定は誤解である。ポートフォリオ評価は、総合学習のみならず、どの教科においても、さらに道徳、特別活動においても実施可能な、そして今後実施すべき評価の在り方であるといえよう。

3 ポートフォリオ評価のための情報・資料

子どもの学習の過程及び結果の特質を収めるためには、それこそ多種多様な情報・資料が考えられる。整理すれば、大きく3つの資料・情報群が考えられることであろう。それらは、「観察」資料群(observation), 「作業実績サンプル」群(performance sample), そして「テスト」情報群(test)である(拙著『ポートフォリオ評価法入門』明治図書出版, 2000.2 参照)。

「観察」資料群では、例えば逸話記録、チェックリスト、質問項目、評定尺度、時間抽出、場面抽出、インタビュー等の方法で収集される情報が考えられる。

「作業実績サンプル」群では、例えば、国語や算数等の学習に関する比較的短い客観的な記述資料としての「学習記録」(learning log), 感想や意見、個人的な経験等を物語風に記述する比較的に主観的な「反省日誌」(reflective journal), 実験したり新聞づくり等の活動を遂行させその様子なり作品を収める「作業実績」資料(performance), あるいは模型や地図づくり、ビデオづくりといった「プロジェクト」(project)活動に関する情報や作品、事物事象を比較したり分類したりする「図式構成図」(graphic organizer)等が考えられる。

「テスト」情報群では、従来の×式中心の標準テストとは別に、例えば記述式の課題テストや概念図づくり課題を出したり、中期・長期にわたる作業課題を出し、その成果を基にレポートづくりを行う等、子どもの"真正の"理解の状況なり能力の発達を捉える諸種の試みが考えられる。

なお、これら収集・蓄積される情報・資料には、子どもの名前、日付、教師のコメント等が忘れられずに記録されておくことに留意しておきたい。

4 教師の指導の改善に向けたポートフォリオ評価の構想

ではいったい、ポートフォリオ評価の実際をどのように考えればよいであろうか。以下、筆者が現在協力して取り組んでいるケースを念頭に置きながら、(1)教師の指導の改善に向けた評価の進め方、及び(2)子どもの自己学習力の向上に向けた評価の進め方に分けて考えてみたい。

(1)指導・学習の過程に関する情報・資料の収集

まず、教師の指導の改善を意図した評価活動に取り組む際、大きく次の二つの特質が明らかになるような情報・資料を収集したいものである。

一つは、教師がどのように指導し、その結果、子どもがどのように学習活動を展開したかが明らかになるような情報・資料である。今一つは、指導・学習の過程の節々において、意図する教育的効果がどのように達成されているかが明らかになるような情報・資料である。

そして、この2種類の評価情報・資料を指導の過程において絶えず突き合わせ、検討する中から、指導の改善策が見えてくると思われるのである。

指導・学習の過程に関する情報・資料の収集

前者の指導・学習の過程を明らかにするためには授業記録の収集が考えられる。すなわち、教師の指導(発言、質問、指示、教材の提示等)と子どもの応答との特質に関する情報・資料を、授業の最初から最後まで可能な限り詳細に収集することである。そして、このためには、前記3に紹介した評価情報・資料(主に、子どもの学習の過程及び結果に関わるもの)の収集のみならず、教師の指導の特質を同時に収めるために、テープレコーダーなりVTRを使用することが考えられよう。

学習の効果に関する情報・資料の収集

【評価の観点】

この点は、ズバリ、ある評価の観点を設けて、それに基づく子どもの育ち(=学習の結果)を明らかにすることをめざすことになる。そこで、問題は評価の観点をどのように設けるかということであるが、筆者は、現行の評価の4つの観点(生活科においては3つ)を踏襲するのがベターではないか、と考えている。

というのも、現行の「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現(又は技能)」、「知識・理解」という4つの評価の観点(生活科にあっては、「関心・意欲・態度」、「思考・表現」、「気付き」の3つ)は「自己教育力」(問題解決能力)の構成能力として提出されたものであり、この自己教育力は今後子どもが「生きる力」を身に付けていく際の実質的な学力(学習能力)になると考えられるからである。

【評価の観点の規準化】

関連して指摘しておきたいことは、評価の観点を設けるにしても、評価のためには、これらをさらに具体化・「規準化」することが大切である。

例えば、「小さな虫や水生生物に関心をもちながら、楽しく採集や世話をすること

ができる」といった「関心・意欲・態度」が設けられた際、子どもがどのような行動なり態度をみせればよいか(例えば、どの生き物も可愛いし飼いたい、住んでいたところと同じような条件で飼おうとする等)を明らかにしておくことが大切である。

また、価値判断するにしても、単に行動レベルのみならず、その内面の状態まで視野に入れておくことも大切であると思われる。例えば、子ウサギの餌としてニンジンを与えるようにいっても、子どもは与えようとしない場合(行動レベル)を考えると、実は、先ほど与えたので、今、さらに与えては死にかねないので可愛そうと考えていたから(内面レベル)ということになりかねないからである。このため単に行動レベルのみならず、内面の状態まで捉える努力が必要があるといえよう。

このような特質は、「思考・判断」「技能・表現(又は技能)」「知識・理解」においても、同様に留意すべき要点であると思われる。

【評価の観点と評価情報・資料の特定】

今一つ指摘しておきたいことは、学習の効果を明らかにするために多種多様な評価情報・資料を駆使する際、収集する情報・資料と子どもの育ちをみる観点との対応を予め明確にしておくことである。もしそうでなければ、いたずらに多種多様な情報・資料を集めることになりかねないし、また、実際に収集した情報・資料が使えない、役に立たないといったことになりかねないからである。

5 子どもの自己学習力の向上に向けたポートフォリオ評価の構想

指導の改善に資する評価を進めると同時に、他方で、子どもの自己学習力の向上に向けたポートフォリオ評価の進め方を考える際、「足場づくり(scaffolding)」の考え方が大切であると思われる。すなわち、最初は、教師が評価活動を先導し、その後、子どもの学年や心身の発達に沿いながら次第に関与の度合いを減らしていき、それにつれ、子どもは次第次第にそれらを内面化し、遂には評価活動の"足場"が除去され、子どもは一人の自立的な学習者—評価者となる、といった指導・展開の長期的な在り方を構想したいものである。

以下、このような方向におけるいくつかの試みを紹介すれば、次のようである(詳細は拙著『ポートフォリオ評価法入門』参照)。

(1)発問の工夫及び仲間評価の活用

一つとして、日頃の授業において、教師は、子どもにそうなって欲しいと考える思考の仕方や、評価の方法を自然に使いこなすように心がけるということが考えられる。例えば、問題解決学習を意図して子どもが問題解決するように授業を構成したり、あるいは、その過程において観察から観念を推論し、その真偽を観察するといった思考操作を大切にするといった授業法が、「評価」に関連しては、例えば、どんな目標を設定しましたか?、今日の書き方で何がもっとも難しかったですか?、次に為すべきことは何ですか?等を導入する授業法が考えられることであろう。

これまでの説明中心、詰め込み・暗記中心の授業—そして、テスト中心の評価に慣らされ

ている現状を改善するための第一歩であるといえよう。

(2)子どもとの「会議」におけるポートフォリオの活用

次に、授業中、あるいは適当な機会を設けて、子どもと「会議」(conference)をもち、ポートフォリオに集積された情報・資料をもとに、子どもと学習の過程及び結果を振り返り、子どもの「弱い部分を確認し、成長のための提案をなす」努力をすることが考えられよう。

なお、もしこの「会議」に親の参加も求められれば、親からの支援も得られ、子どもの自己成長にとって有望な機会となることが報告されている。

(3)子どもの自己学習の促進

次に、ポートフォリオを使いながら、あるいは授業において、子どもが「自己評価と目標設定」の習慣や能力を次第に身に付けるよう留意することが考えられよう。

例えば、教師の意図する「評価の観点及び評価基準」を示し、これに基づいて、子どもが自己の学習結果を自己評価する、そしてこのような連続的活動を通して、そのような観点及び評価基準を内面化(共有化)していくといった試み、あるいは、授業中に、子どもが学習のめあてを作り、それに基づいて、授業後に自己の活動の過程や結果を自己評価するといった試みの導入等が考えられることであろう。

そして、このような中から、子どもがポートフォリオに残したり、あるいは除外する情報・資料を次第に自己決定することができるようになることを期待したいものである。

6 ポートフォリオによる数値的評価の努力

評価資料の多様さとその特質のゆえに、標準テストのようにその結果を機械によって一律的に瞬時に処理するというわけにはいかないが、信頼性と妥当性、客観性のあるような「得点化」(scoring)及び「等級づけ」(grading)の試みが進められている。わが国においても早急に充実させる必要があるといえよう。とりわけ「等級づけ」に関連して、集団基準準拠法(=相対評価)によるのみならず、個々人の「成長」の姿を捉える必要が力説されている点が注目される。しかも、その成長の度合いが、達成基準からみた学力(achievement)の達成状況、その学習の質(quality of work)、及び長期にわたる個人の進歩(progress)の状況といった三つの側面から捉えられようとしている。貴重な試みであると考えられよう。

「総合学習」(黎明書房)2001年5月より